



續風土記
 自十四至十六

甲子年
 亥月
 廿八日

卷八

共十五卷

ル 4
 375
 6



筑前國續風土記卷之十四



遠賀郡下

黑崎

妙現社

熊手權現

園田

諏訪大明神

祇園社

山寺

鳴海山土穴

三神山

大塚

錢屋圃

馬塚

古館

大歳社

初浦

四倉山

枝光村

屋倉村大幡社

烏旗

名籠屋崎

仲原村

島郷

是以下至末皆島郷三属

八尋七兵衛
藏書



山鹿村 浪懸岸 茶臼山 厩所山

狩尾大明神

洞山 板敷 石橋 山鹿岬 馬ヶ浦

烏帽子岩

脇田洞山 送見津 白鷺 小嶽村白山控現社

小石村 若松阿蘇島 資皮島 大渡川 修多羅村

藤木村 二子島 畠田村山 弥勤 海士住

洞海 大鳥居村椎木淵 皇后淵 庄江

筑前國續風土記卷之十四

志賀郡之下 黒崎

此地本列の東北に端ありて豊前少名をこきけり乃
宿禰よりハ冥河と道く非常と戒り婦女を券契ふ
くして他國へ送る事とゆふらん志賀の古跡畠田村より
け城ハ長政公入國乃後其を志賀の身禦れし事榮せられ
家臣井上國防之房二方石乃此地とゆふ尚郡の事と
司りしめてけ城と云ふはけ所と云ふは志賀と云ふは
其は此城山の南にありて農人の宅一區ありて此山と云
ふは山は是より依りて城と云ふは志賀と云ふは是より同

防此所を在城し其家人も多し宅と一処に高を築きて
後所田所の有所より是よりして此の所乃名を城の名
よりして馬崎と云然田所より一むりハ毎月市を立つる人
所乃西と下市と云東と上市と云定喜武筑前国驛程
乃数に隈崎と云此の所より一よりけ道の所と然中と号に
隈崎を別け此の所より此城元和元年一 台命ありて一國
一城に成り時破却せり又むり一太坂性来れ後海船考
前少念のころよりて當ふ他國より上系或ハ伊勢美宮
する人皆小倉よりゆきて舟よりして来りし近年ハ馬崎
も亦後海舟ありて出来此の所より舟より來て上下する
もの多し其每人ハ馬崎の城あり西とあり

妙見社

馬崎の城山の東と小山あり妙見山といふ西の舟と妙
見社あり

熊子権現

熊子村あり此の所の神三座あり殿大國主命あり二
殿八縣主神あり之殿ハ少彦名命あり孫主神とハ國
孫主熊野とありと云昔ハ大社ありしハ大友氏ハとあり
鏡と云沖橋に侍橋及橋の場あり田圃と成て云
しくそ名と云やと云沖の流の流あり濁様の男女
此流ありと云此の所と色愛し或ハ濁りとなると云り井と
氏家人坂本何某と云置と流ありと上下と云上水と

以て神代とてしるすといく里人其用らと云り東社の跡
多く跡さう尚かこいふと傳へるもあつ神領乃地態
と川野宮生の内と云ふ一今こもつて田の字とありて
名さうく跡さう山宮林の下乃海田とて身元と云ふ氏家と
九形跡さうありて是と熊子村の境内ありと云地と昔
熊子神現の名居と云ふと云傳へる今こもつて
ひり交紙乃種と傳へる云其昔風と云ふと云
六月晦りとて村民熊子乃祠宮と杉麻丸葉とて種と
るさう里人の海ありて身と洗ひ牛馬も洗ひ
そとと云

△園田

熊子村の内山と云ふ処とあり古事記と 神武天皇豊前
乃宮依らる熊子乃園の事と云ふ一年すす傳へて記さう
此水つと云ふあり一景記と云へるさハ園の事と云ふ
あり一年ありと云ふ也一説と云ふ園れさう神皇正統記
村とありといふと云園の邊と云ふさハ此河と正と云ふ
昔ハ神社と云ふといひり此社の跡と云ふ三説許あるは
四方と云ふあり社址乃地と云ふ石一面と云ふと云
大なる鱗せをの神社と云ふと云付魚と云ふと云
と云と云ハと云熊子神現の社内と云ふ又山寺の下海と云
さうと云王屋敷の跡と云傳へるあり又さう此海と云
后跡と云ふ所と云是 神代皇后の大濟より入て洞海へ通す

この時暫くも西より玉の山を

諏訪大明神

熊手村あり是を麻生氏先祖守都宮行し初めは河
と勢法をいとも昔をいとも此宮作しておれの時を
麻生氏鶴鹿と神前と傳へてありしと云ふ外流福馬猿
樂をとれりいとも今も皆廢絶す天正年中兵火よ
りて湮失していとも無廢の地とあり入海の中と夫婦石
も是らむいとも居れりる地ありと云

祇園社

昔は後田村枝村上の名と云ふ所の四倉山の下あり延寶年
中後田の所よりしるす移せり昔社の名し雨とも祇園系

と云廣く是むいとも麻生氏の創立とす社之祇園及
山王権現春日大明神凡三座とあり石鳥居元禄十四年
村民建立とあり

山寺

熊手村の枝村ありあり熊手と号し昔此所より院多
りしゆいともて山と云桂昌院養釋菴用院院
行唐と云地名あり如何なる寺なるもや今も
事實ありしり

三神山

熊手村の内山寺下貞元と云ふ池あり池の内小山
あり是と蓬萊方丈瀛洲の三神山といふけいりあり

乃住方より記録を冲箇に記す所あり

大塚

山寺と貞元との君ありて是七分斗あり是を麻生氏の塚ありと云里人冲箇に記す所あり村人いふもいふも是より下りて祀とせん

銭屋圃

熊子村の内よりつこのに記す所ありて是を銭屋圃と云其後の秘を元通國吉とありてと云

古館

後田村と宅の址二を記す所ありて麻生四郎の屋敷一と云麻生治部が掃と云一の宅地皆麻生氏の家後この宅の址を

ふゆへに古館といふ又後田村の中へ紅梅地蔵堂と云是を麻生氏家へお梅と云一女郎せりと葬るる所と云いふあるゆへに地蔵と号せりともや

大歳社

熊子村山寺の下の海邊大歳と云所にあり小社之是素戔嗚尊乃所子大年祀神と系する所ありむじり大社として毎年二月十五日に榊毛れ祭ると年穀の豊凶と云ふ所あり其法を炊飯と云漸と云実子楯中楯映楯の名と各小冊に記す所あり金れ中の漸く入て是と云筒れ中より粒の多く入を以て其れを穀の實のりれと云と知る所外田圃と虫の災ある所を祈て必給ると云

とて農民等作てりていふるものありとあり昔々大衆
河もいと云傳へし今と云をさうの土中と傳へはひし
衆具多く理せり

四倉山

前田村尾倉村の上より郡中第一の高山の岩は鑿
多くつきり表瀆郡古河より多るあり四倉山より松山を
ひきく松山より帆柱山をひきく四倉山を東より松山の中
より帆柱山を西よりひきく山を並ひる高山也

枝光村

け村は尾崎の東豊前の方一里余あり村の上より山を飯
訪大明神の社より依てけ山と伝へし昔々大社なり

聖火入て焼失せり其後山社と立て今とあり七月廿七
祭社を昔村に伝へし山の八幡の社なりといふ今ハ圃
と名れも尚其山と下の宮と云此宮より三四丁山
中より山よりけ山と道祖れ社を八月十五日八幡
祭の時に中宮より清事をして其後伝へし馬をいとい
二十年前より其山より新田出ふ今ハ山と伝へし昔々
け八幡を新破とて村中より移せしと其後又破換せし
言はしりしなりと寛文五年詔傳しりて詠訪大
明神とお殿よりあり此二神より麻生氏下野守守都
宮より勅傳せしといふ詠訪の社も船中社ともあり
又村中の田代字に大衆と云はしりし山と叢祠あり是

よも大歳大明神の社と云は村の小川海をさし物山とて松山と
さし物山と迫き小嶋と松嶋と云又さし物山と号し石を
つりあると倭子嶋と云其の生つる二ツの少島と申し白端の嶋
といふ倭子嶋と二ツお並へり

尾倉村八幡宮

所社を村より西往來の尾にありて山と云ふ所の狩り
法座しと云ふ名や石群昔を大社とて八月十五日の祭りよら
神輿神幸も一と云は儀柱といひて今も神旅所の跡あり
又神幸はる物と云ふとて田の中へ形をくり強きり神幸
祭の村中へ一と云は儀柱と云ふとて布と織と云ふ者といは儀と
擔りて神輿の神先とゆいめたりと云は是女切と

るけ早なる戒ありし今もを遺傳して村中の女あり昔は
必布と織と云ふ昔流福馬ありて馬場ありと云は儀と

鳥旗

若松村の向ふ村に其のりて入海多て舟とて海と云は戸畑
と書く物と云ふも万葉集の仙受抄に龍前風と記と云く
鳥旗と云ふは是と云ふ字と云ふ

名護屋崎

鳥旗村の東北海際ありて平地より出嶋と若松村の小
よも山の出嶋あり小田浜と云名護屋崎と海と云は
お刺たり日本記仲哀天皇紀と名護屋大跡と以て
西門とすとある是則は此の事といは地と神社あり猿田彦

命と称は

仲原村

多撫村の東北方の隣邑として昔より境入り仲原村
乃東に長二百石横二百石同評の唐と云ふを昔は
村とをい村とト者三人あり陰陽師と稱はる祖知
以系圖あり凡國中はる陰陽師千人許り又方言
ト者ト博士と稱するといふ陰陽師ありて占と司と
ありて父と稱して而も其村より成りて村とあり
切て家々の禍福と占を以て業と云ふは此村と
赤石馬ノ入道休白と云ト者其父赤石馬ノ占と云
ありて休白之業と語次郡の人と信せられり

天情篤重よりして雙重之父赤石馬ノはてはては孝あり
常に父の望りてはてはては事也國主の祈禱に
こころし時二教三日はては外一生又こころ
す我も父に稱はるといひてやまは父の稱受の時
安否を伺ひて我も急る事なし父も亦子とて我
をよみ安否を訪ふ休白も時より父の心と悦り
しう我はては我としはるも父はるる遠くとも我
も余ら吾我身れはると云ふこころも家業トと業
すきこととより耕化ともいふれり或時苗と植る時
家軍より隣村の田吏と云ふ集りたり一はつとめ
田と植時におもひてをかりと云ふ父の望りて

山麻乃小柏系浦の西一丁許海と隔て小宮あり堂
山と云其より堀子社あり又地蔵堂あり其地海道の
しきり小宮より岩のちりへ入る所あり堀切なるあり
横二丁許を汝溝なる河と舟をくしては後難しを望
又此より其崎の内へ洞山なる洞の内高き三丁許横三丁許
長さ十丁許ありて南山と通まり其境に二つの崎あり
柏系村に属し凡國中へ洞山に河をい地及根田村と
柏屋部藍崎乃なるあり崎に凡洞と山ありて
大宮ありてこの表返りてといふ唐土の洞多し 本邦より
稀なり

板敷並石橋

是と柏系の西堂山の西に崎の内あり柏系に属せり
板敷は海中に長く出たり岩よりて其年々なる事怪し
板と敷らるあり石を名とし長さ十二丁許横十二丁許
あり石橋と其東北のりありてあり村俗にさなると云
是石橋と唱導するに入江の宮あり其より天成の石橋
あり幅を人守長さ丈五寸ありて人乃りせり
橋のしきりありて人乃りて後洞山板敷石橋三つの物
造化乃巧妙にして是行る地也かやうの天工の石橋
他由も多しと云ふに其地帯羅漢乃石橋なるあり
亦いすこえん

山麻岬

山麻村の小一里と岩屋村より其少なる山流と岩屋
崎と云是山麻岬岬よりむらしけきとすはと山麻と
云々ありし日本記に 仲哀天皇八年春正月 天皇
御幸よりりあふ山麻の岬よりとて園の邊より
すはと流るるは河の事と云れ浦ハ岩屋也

過山鹿岬詠

蓮禪

雲海沉沉望自由聞名蓬島不遙求潮穿沙岸
松根露廬守山畦稻穗秋
眺々望山何處々有田畝
稻毛盛熟守者有戶故云
及老何堪羈於路當時迎見往來舟未全衣錦
歸々土舊友莫朝念薄愁 出無題詩集

馬ヶ浦 烏帽子岩

岩屋浦の東に海をさへあり岩の平らなる事怪と
了場れとし長百有餘を内長六千五有許を横十二
有あり長二十有斗ハ横之有ありとをさの海流り
烏帽子形と流るるを岩と云又奇境あり

服田洞山

服田浦の西に懸橋といふは其西に洞山を洞口
方一間半窟内奥へ入る事あり許岩と懸と穿て
るや山麻乃洞より山をれも奇異なるを又と
東に大なる窟あり穴の口は七一間半を穿へ入る事
あり許ありと云はるるを又と云はるる長六有
横之有あり許窟穴と云はる又奇境あり

洋見津

岩屋と沼田との間にあり海のかつらる所は是より
東へつゞいては凡福園より大坂の上へ海路は海
のりる所ありあり海中れ地勢言りてよまらぬは
及国防れしし備後の白名をとりし海乃かりぬ
習とハ上下の海のつらきと備門よりぬく口も
海と陸地とすといふは事や一説に長門の
武久村の澳と洋見え海と云ふなり
てりる所の白と云ふは海のかつらぬ海見の海

白島

沼田沼浦の海にありあり二島あり二島と云ふ

白島といふ東にありと雄島と云ふ西にありと雄島といふ
雄島は凡福園十町あり
雄島より大坂なり 其間あり事十八丁あり雄島といふ
柴多し雄島といふ蟹牛あり口布記仲哀紀といふ柴島を
削て沖籠といふとあり柴島といふ島の事ありん柴島
く生る所と柴島といふと後と云特して白島と云ふ
よや白といふ柴島の削おをとりし又若松れ入海と云ふ
嶋とも資波嶋と云 ゆかたに 物とも是ハ獲入海中
とありありはここらにあり沖籠とすといふ柴島といふ昔
毛利元就海軍と後より沖籠より十八丁沖のつと
とありと母とつとあり元就宗船の碇海岸の岩屋より
ありと沖と沼田浦といふ島の事ありける 彼は十七島

をまゝ海をへ入るを上なるを乾斜るは感懐一白崎
と永代飯考く婦りわい子孫飯田脚の浦と居ても永
くうけをあとつらして飯くろゆへ今もあつとちあつとを
飯くうけをあと白滝権現 應永明神の社あり昔年長門
ふの若けをあと飯田の内ありとて毎年来るをこれの事と
あつとんくす飯田飯の浦の若きと制くれともうけか
りす又あつてありしゆへ飯田飯の浦も若きも又付て國
傳く及の終く長門國の若七人とて傳くて赤敷くわ
是よりして飯田の若八弟傳くやまわ飯もとも飯七人の
若七人魂業とありつらや七人の隊と業と邪神と
毎年六月と是とあり

小嶽村 白山権現社 十二隊

小岳村の山上に白山権現の社を是伊特冊尊菊理姫と
ありて麻生兵部が浦守都まろ白山権現と勅法と
いひしうさきりありて大社ありしやけ社の多居と云ふ
とも大居居と号して村のあつては村の内小岳外小嶽
とて南山ありあり内小岳と中村と一外小嶽と枝村と
小岳の高き山あり内小嶽の外小嶽の南とて又小岳
れ南の禁く惣野権現社ありしうけ社と社傳八坊
ありしとてそ宅址村申しあり
院 主坊 辻坊 西坊 東坊
一坊あり 又小岳と飯浦の若く白山の社れ西く十二隊並ひ
は

小石村

初めを誠名と書たり今小石と云はれ浦より小石と云はる
る亦けり誠名といふもや

若松

所々氏家多し是尚國東の端と多て其前長門の上
方より此後之昔ハ修多羅村ハ枝村ありしハ長政公入國の
後列村とある亦祇々雑記の白くつりて飛龍必
松の浦と云ふも別けしと云ふ人麻生氏の足才或寺
む久と云ふわが山にけり人本たうきけり内外海と云
ふと増えれりありしと云ふ入り新工うわらわたり又言ふ
くこありけり將軍家と奉公人との傳きハ都の物語

濃とていつくの音ゆめあつたつたこころはさきのいつと
つらつら思ひやぶる直かこつた文の月れ光うもきく
りよひと音ち十二夜なれハ散白

夕やまのいと音しと道ぬ路乃月

け時宗祇々書せしと云はれまは祥と云ハ廢してせし
長政公入國の後此處ハ飛龍殿十艘とつまき舟司舟本
多と置と急用と結る是ら芦屋洋ハ舟あふし船の
は本成とくけいけり役の人と舟とあそび大坂へきす
きとるこ△

河仙島

仙覺の弟義の注とあるく飛龍國風土記とて多

旗の海中とあり小嶋あり其一と河斛嶋と云嶋と支^シ
子と生^ナハ 支子ハ山抱 海と抱魚と出すと一と資波嶋と
云と嶋た鳥著冬薑と生ハ鳥著ハ鳥著冬薑と
迂来ありとあり今ありとありと鳥著のありとあり嶋
と中嶋と云是則河斛島成嶋の中と神社佛堂等
此中嶋とハ長政公入國の後城と築て中嶋城と号し
家后三宅公授と壘と一と大坂陣の後元和元年
公命とありと城と破る

資波嶋

中嶋乃西と鳥嶋と云あり中嶋と云嶋とハ大と鳥嶋
是風と記と記と一資波嶋ありと鳥嶋乃西ありと小嶋
ニツあり鳥嶋と云嶋とハ大と鳥嶋

大渡川

若松の入所れ口若松と鳥嶋との馬を穿川ハ水芦屋
ハ東と記と云嶋と西ハ方若松と流又三記と云嶋と
つと嶋と若松と流と出る事川の如くあり大渡川と云
リ也記 仲哀天皇の記と名護屋大渡と云と西門と
すとあり名護屋ハ若松の向ハ鳥嶋村乃出嶋と大渡と云
一藻嶋と云嶋と大渡川藻嶋と云と一記と云

若松 藻嶋と云大渡川と云とハ鳥嶋との後記はせり 昔之
此川ハ神切皇后の舟れ通しし河と云一と若松と云河
と記と云と河ハ水ハ物と云と云と長年中と一と夜寛

永年中一夜い水氷となり又天和三年十月晦りより雪降
降走の四りありと云ふ事ありき河つきの川も皆氷りし
此の氷りて舟の行も滞りて是長より是の事字に
い河入海をれと云聖川の氷もなると鹹淡お交りて
川と等しく氷とありて大後川と稱するも亦い入河也
い川若松より海至住の里ハそ後河はより唐杖あれも
凡十六六下廿所許も其水これ聖川のそ唐杖事深
川流後川そ余の大河と云及ともい川入海と鹹淡
お交りぬと云唐杖事かのと云是下舟の大河と
傳へし若松より海至住との里まで大後川なり

修多羅村

い村ハ東南の方海と向り若松村小石村若木村皆修多
羅村の枝村也 長政公入國の後おのり河村とせり昔
此村ハ修多羅山宗若寺と云寺ありとも修多羅と
を佛經の梵語なり修多羅村の小田山と十二塚つ
ありて小石修多羅の里なり 流後久留米の海有馬を流
はり 長政公をて上方住
本のこめい河と云舟と多くつき船はみまとも云と云
の耐寛永の始めりけい河と彼舟ありと云はる後ハ若前柳の浦と舟と
業

若木村

若松と二島とのる山の南側とありて是境四一里あ
り長き里あり

石峯

若木村の上とあり上と大石を石家と名づく島に
才一丈高山也次と富田村の上乃浮動山と云一丈小山嶽
山なり

二子島

二嶋村と云三河のむく二嶋二ありまな村の名も
二嶋と云者用り九千回ありあり其四方の峯嶮く七
跡りあり一丈島多し大なる地あり

浮動山

富田村乃上とあり山上と浮動堂あり此山あり

海士住

竹並海士住の前あり作と元禄元年新田より出たり

竹並の前と新村兼竹並の前より海士住の枝村小嶋
と云知すて新田より新堤と築て長さ八百二十石
ありと云と新田より水門二ツあり向ひ乃枕崎へお石を用
て堤と築ぬ新田凡五十余丁あり

洞海

若木より若木とあるこの方入海を若木より海士住と云
海の南山麓と事半里許あり海士住より河川の西までハ
山ありて海に下り甚狭し狭と云ふと七石ありあり
大舟を過すは是と洞乃海と云凡くきとハ狭しに水
乃通ると云水蓋の云れ漆と云しけ意と日本紀と仲
哀天皇八年春四月 天皇御嘗て幸しむ時 神

切皇后ハ別舟より河の海に入り若松の方より大坂の
瀬洞て舟舟進む事と傳へ時ニ園徳主徳賢文と爲り
洞の海より 皇后茂遠へより別舟舟進む事と傳へて
壇場て忽と魚沼多池と化りまゝと與ると集む 皇
后ハ與りて持少と云ふありて怒り心や痛むの如
の湯と云ふて舟舟進む事と傳へしゆりまゝと云ふ
于て 皇后の舟舟進む事と傳へしゆりまゝと云ふ
を新田内七監田と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふ
此如く舟舟進む事と傳へしゆりまゝと云ふと村老
傳へし其上の山へ平らけりしゆりまゝと云ふと
輿掛の杉と云ふは 神切皇后の舟舟進む事と傳へしゆりま

魚沼多池と化りしゆりまゝと云ふは 皇后
後の湯と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふと村老
と傳へしゆりまゝと云ふと傳へしゆりまゝと云ふ
株の内ニ株ハ大風と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふ
沼多池乃流と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふと傳へし
と云田の字と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふと傳へし
所より又高洲村の田乃字と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふ
と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふと傳へしゆりまゝと云ふ
の方より入り園の邊と云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふ
よりしゆりまゝと云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふと傳へし
成りしゆりまゝと云ふ事と傳へしゆりまゝと云ふと傳へし

松島の内池大川ニツルコトツル池と云は別無名池か
んんともあつた物もけり河の海よりまきく方遠く
り且池のすくろる久し物なれり海大池に依り
へりす皆素合をくろ虚説をまひ必信すへり依り
事なまひ唯沖舟のこほりし河の海乃入ればくろ海産
のあつりく忽と記さる小池ありといは後初的事なれり
之語は代りてく強くくく人昔居る云朝鮮征伐に
犯希名獲金こちりむり神切皇后の詔と云るしむ
へりく徳信へ伝ふ昔の吉例を思ひて河乃海乃
通り流りくや

大倉居村

昔麻生氏小岳山乃上宇教ま白山権現と勧修し此
村と大倉居と云くゆ其後け村の名と云

推本例

大倉居の西太田水乃東少あり大杉もそり推本
あり其ちハ流之例之是河の海乃中なり

大乃江

大倉居村の東ありやう流り小川之河の海に入地
まきく若松の方と芦屋れ方との瀬境をけりそり
りハ流合ひ又両方とひく是外海に瀬境遠く
のまきりく又昔け東くふたきこの橋とて陸地より
ゆれくこ城一橋之河の海に渡せりといふ

このまじ橋杭を程残さうといふとを津路の方より
島の方へ渡ると橋一はもあ

皇后洲

海士住村と店のはれりありけ内海を神切皇后の
通りあり一は行も此所も皇后の沖舟とて
よまし

有毛野

有毛村の海をさあり東西十二五十有南北十二
二十有あり是放鷹の地に林ありけ村のしり異
多於百合草あり

筑前國續風土記卷十四終

筑前國續風土記卷之十五

宗像郡

宗像大神

三社惣論

田島神社

宗像大宮司宅

大寫

澳津島

宗廟大宮同字

大宮

筑前國

宗廟大宮

大宮

筑前國

筑前國筑風土記卷之十五

宗像郡

日本紀第一卷之八曾肩と書り、舊事記之六宗像とし
 古事記之六宗形と云凡和漢の習ひ訓曰くこれハ文字
 お用ハ常礼事之宗像と名付し之ハ宗像の社記云
 宗像の大神自后崎の山天降之時以香粧玉と置
 奥は宮乃表ハ政壇紫玉置中は表ハ表ハ表
 並宗像宮ハ表ハ表ハ表為神體之形納之宮即納
 隠し固田身形郡ト釋曰布記曰先師之説云曾肩神
 體為玉ト由見風土記然則尋其由来其神像ト云
 考ありト各説ト云々ト宗像ト名つけし事

三神冲身其形ともつと二宮の細くなり身其形乃社と
いふ三神のいすす処あるゆへに身其形と稱すみのとむ
なと音お通すまはいつへ和漢にありの辨してむを形と
名つけしなり

- 一 凡い郡を少の海とてうけて海中と嶋あり東を幸聖郡と
隠りて高山とてつと浪とてし南に鞍馬郡とささく
又山と隔て西を京聖とて祇園郡とけりなり郡中
山を多くして河とて小川あり凡河海の利乏くす
只少海とて多くして可く颶風の災あるの事
一 里民曰い郡に六嶽あり室本岳高き岳許斐嶽宮地
嶽とてさけ大崎沖嶽とてなり

- 一 凡い郡に唯二ツ川あり田崎川あり川ありと余徳村の谷
より流け二川と合て少海と入る二川と源既近とて
深山あり一河を河水とてなり
- 一 此郡の南に山をさる色あり東へは舍利院内殿本木
大徳四王坂新所名後高系吉留之乃のふふ像山
より海をさすこの山下に村南より山の序に佛丸石丸
標あり二高丸とて山田池田上八あり

和名抄に載る此郡の山名十四あり

村山田 とて村の 怡土 とて村名 荒自 とて村名 聖坂 とて村名

荒木 とて村名 海部 とて村名 席内 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名

藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名

藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名 藤原 とて村名

石浦のきとこのふ
候と稱す名をいふ
今もあり九の字
あやまると九と書り

今稱す所の村名

内殿村	上西郎村	下西郎村	石光村
津九村	久末村	在自村	須多田村
大石村	渡村	津屋崎村	英浦
舍利院村	崎所村	本木村	八並村
用山村	村山村	大丸村	东乡村
怒山村	大徳村	英所	大井村
久系村	田隈村	勝浦村	英浦
大崎村	英浦	牟田尻村	田崎村

神湊	徳主村	名残村	友系村
吉島村	石見村	掃炭手村	平等手村
田久村	山田村	須五村	福本村
土宮村	赤間村	休丸村	三郎丸村
野坂村	曲り村	光園村	河原村
太礼村	田野村	上八村	江口村
鏡崎村	地崎村	新所村	池田村
吉田村	宮地村	福間村	

宗像大神 三社

延喜式神名帳之筑前國宗像郡宗像神社之産

英名
神大

と記さるけ三座の神ハ田心姫湍津姫市杵嶋姫より
田嶋大嶋渡嶋三河と稱す有りす凡口奉記第一神
代巻上と考ふる素戔嗚尊父母の沖心と寸の玉足
根の國とやいふ事ありと云々高天原と云々
姉乃等天照大神也とあるへと後ひと云々すありと
の事と云ひしと天照大神ハ素戔嗚尊の國と集
んとする志ありと疑りせむ兵の備として侍あり
素戔嗚尊鳥をけしと云て吾初より其さる也但父母
の衆勅すゆへと云さる根の由とすありと云ん
と一姉れ等と相まらんすんといんをすんをて
云々勢と踏わたりをさるありありわも思姉の

考かりていとありん事と云々宣ふ時と天照大神又向
ひて曰く一姉れは何の所より赤心とありん對て曰諸
姉と信し誓んをまじ誓約の申し必れ子と云ひしは
吾うめんは是女ありん則濁心ありと云れ也と男子
ありん信ありと思をまじと天照大神別素戔嗚尊に
十握劍と云ひをて三股と云一天之志名井とあり
すいさささささささささささささささささささ
と名付て田心姫といふ次に湍津姫次に市杵嶋姫と
へて三柱の姫神す又天照大神勅して曰く十握劍
は是素戔嗚尊鳥をけしと云ゆへに三女神ハ是く是
亦り也と宣ひ別と云素戔嗚尊鳥をけしと授ふ是別

筑紫の曾肩比君等といひきふ所の神是なりと記さる是
日本記と記さる最初此説ありハ田心姫と才一とし一瑞津
姫と才二とし一市杵嶋姫と才三とすとすこと正しと云へ一且
後代文徳實録をく記さる一此等も皆是の同一條ハ
誠と説とすこと正しと云へ日本記意事記古事記より後
舎人親王の傳りあり書ありハ前書ハ失とも改訂して
ひく記さるるや古傳も後出の巧ありとありハ高
事記古事記より日本記と説と云へきり又日本記の内
一書ハ説と曰く日神宗彥鳥尊とお對して立て指きて
曰若余らふらん兒必當と男ありんと宣ひ平て是ふか
せり十握剣と食一呪と行す瀛津嶋姫と名付く

又九握剣と食一呪と行す瑞津姫と名付く亦八握
剣と食一呪とあり田心姫と名付く凡け三神居す下
日神よりみせらるる三女神と以て筑紫測り傳りま
しむ依て教て此三神は宣しく及中と説きしりて天孫と助
あり天孫のこころいつくまきと宣ひ
是天照大神の御時三女
神既と宗像と瑞津あり
建仁寺下下旦世に此帝の宗像の三神とあり
ありハ奉幣文と下と云へるもいふ所あり
又一書ハ説く天照大神八坂瓊杵玉と以て天の志名
井と云けりさて瓊杵玉と嚙めて以て出る宗貴れ申さ
る神と市杵嶋姫命と名付き是を瀛瀛と云す神こ
瀛の又瓊杵中とくひりて以て出る宗貴の神とあり神
と思姫命と名付く是ハ中瀛と云す神也大嶋又瓊の

尾とくひ以て吹出る事嘆の中とある神と湯津嶋姫命
と名づく是と海濱の田嶋あつりハ神傳の至れ海濱の社ありしきとまありと強きなり在仁神
ありとあり又日本記一書に流し日神先食其十握劍化
生兒瀛津島姫命云々古事記ハ天照大神玉璽蓋鳥
命ハくあさる所の沖劔と以て天の志名升りありとくきさ
くまにかんて吹出るいふきの狭霧中とありとく三女の神
あり十握劍化生神と名づく瀛津嶋姫神と云又田心姫
又田心姫又曰田霧姫九握劍化生神と号し湯津嶋神と云八握劍化生の神成
号て市杵嶋姫と名づく瀛津嶋姫命ハ是を瀛とありと
の神是田心姫と号し湯津嶋姫命は海濱とありとありの神
是湯津嶋姫命とあり中津嶋姫命ハ是中嶋と存るありの神

是市杵嶋姫命あり又曰田心姫命又奥津嶋姫命と
名づく又瀛津嶋姫神と云ふ像奥津宮とすん是を
瀛とすんはの神之次ニ市杵嶋姫命又依依姫命とす
又中津嶋姫命とすん像中津宮とすん中嶋とあり
又の神あり次ニ湯津嶋姫命又多岐郡姫命と名づく又
の名と号は湯津嶋姫命とす像湯津宮とすん是海濱と
ありとあり神あり古事記ハ白多紀理昆賣命ハ胸形の奥
津宮とすん次ニ市杵嶋比賣命と号す有の中津宮と
すん次ニ田寸津比賣命ハ有るは湯津宮とすん
此三柱の神と胸形とありとく三河大神とありとあり
三神兄弟は次ハ右に記す一日紀初に流すとすん

三神沖積産の交々二部の内にも亦設多ししてつらき事
なり事と知るに後花園院文安元年と大正天皇氏後三社
の縁起と改より書せたるに初に才一神を海濱と集り
て嶋と築き居ると書れ奥に才一と書き東世と云ふこと
異國と改めしと云きより沖積ありて彼嶋と云ふこと
別奥沖嶋と号し是日本と云ふ處の中向に書瀛と
居る事と云ふこと田心姫と号しなる才二神は居ると中海の奥
に才一と云ふ今大嶋と号する是の中瀛と居る事と云ふこと
湍津姫と号しなる才三神は居ると海濱と云ふこと今
田嶋と号しなる事と云ふこと海濱と居る事と云ふこと市杵嶋姫と
号しなる事と書きたるに縁起と東世の説よりして云ふ事依

らるる事と云ふ事と云ふこと況三神産産の地日
本紀高事記古事記と云ふことと云ふこと只産産の時も日本記
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと田嶋の神職
と大宮司の時よりと云ふことと云ふこと田嶋乃云と云ふこと田心姫
ありと云ふことと云ふことと云ふこと三神の次才口在記の由後と云ふ
ことと云ふこと田嶋と才一と云ふこと海濱乃社と田圃と云ふことと云ふ
ことと云ふこと田心神と云ふこと田心姫と云ふこと湍津嶋姫と才二と云ふこと
嶋代神と云ふこと天の川のたつと云ふこと才一と云ふこと湍津嶋姫と云ふこと市杵
嶋姫と才三と云ふこと其は嶋の神と云ふこと又云ふこと市杵嶋姫命と云ふこと
おきつと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと其は嶋と云ふことと云ふこと
市杵嶋姫と云ふことと云ふこと又云ふこと湍津嶋の社と云ふこと高事記古事記

及大宮司氏後、孫起れば後と以て認りて奥津嶋の神と
田心姫とすといひ出雲より來りて徳彦と云ふ神を以て田
心姫とすといふは多しと云ふり次に湯守姫と大嶋と云
ゆり次に市杵嶋姫は海邊に止まりて云ふは神のつく
成りて云ひ古書に載る亦今世に傳ふ如く後述に
して社家此傳へる所も又者其理あきらかと云ふ事と
しつれと非とすといふ物も此二神の徳彦おのくつまは
と定難し二神皆日神の子とて同袍なり神事あき
まもそのつと云ふ神のゆへに朝廷よりおとせむ神位も
皆同位也凡そと云ふといひ才と織しむる者凡そ其
所當りて旅と云ふのれにむりて賢くして君とあり不

賢くして長とありたりもあきか必姉妹の才と以てこそ是れ
と長短と争へる凡そ凡そ大嶋奥津嶋二神はたつと
三神と一社と云ふて各其社の主とする所と申すあり
り奉る社家といひ光仁天皇天應元年と神代とて色
はまの社内と奥津嶋中は嶋と神とも勅傳して一
ありありと云はれり亦二神徳彦のつとと云ふは後述
といひ孝靈天皇四年と出雲國敷戸川上より菟原宮像
と沖津幸と記さる物と云ふ天照大神乃勅とて神代
と云ふ既と菟原と記さる事口布記の文明白され
是れは後とすといひ他後と云ふといひ出雲宮より海
邊幸ありといひ一神は奥津嶋とありといひ次に大嶋

在止卜申利又肥後國余地震風之災在天舍宅
悉久什顛利人民流亡利多如此之災比古來未
聞止古老等毛申止言上利多然間余陸奧國又異
常留那地震之灾言利多自餘國々毛又頗有伴災止
言利多傳聞彼新羅人彼日本朝止久岐世時利與無
岨之氣量其意况余兵寇之萌自此而生加我
朝久无軍旅天專志警備利多兵乱之事尤可慎
恐然我日本朝波所謂神明也國利那神明乃助護
利賜波何兵寇可迫來波亦我皇大神波掛利之毛
畏岐大帶日姬乃彼新羅人年降伏賜時余相
共加信賜天我朝乎救賜比崇賜利奈而今如此尔

押侮利氣色乎露出事波乎寂毛是大神乃聞
驚怒士志利賜岐信物利奈故是以逆五位下行主
殿權助大中臣國雄乎差使天禮代乃大幣帛
乎令捧持天奉出給布此状乎平分聞食天假
令時世乃禍乱天上件寇賊之事在岐信物利奈畏
皇大神國內乃諸神大知唱道岐賜比未發向之
前余沮拒排却賜信若賊謀已熟天兵船必來
倍在波境內余入賜波須遂余還天漂没米賜比
我朝乃神國止憚禮來禮故實乎澆多失賜布
自此之外余假令天夷俘乃逆謀乱之事中國乃
盜兵賊難之事又水旱風雨之事癘飢饉之事

余至^{萬天}國家乃大^止禍萬性乃深憂^止可在^{良年}
皆悉未然之外余拂却銷滅之賜天天下无躁驚
久國內平安余鎮護利救助賜比天皇朝廷乎寶
位動常盤堅磐余夜守護^音幸倍矜奉給^{倍恐}
^{美毛} 申賜^{波久} 申^止
三代孝祿曰陽成天皇元慶二年十二月廿四日兵部
捕從五位下兼行伊勢權助平朝臣季長等上奏云
神^之奉幣^一也又曰元慶五年十月十六日左大臣等
依請大和郡城上郡從一位勳八等宗像神社准于筑前
本社並神主以高階真人氏人為之又觀靈三代格曰左
政官府應充^之宗像神社修理形云云件神主大和

國城上郡之内与野之筑前國之宗像郡從一位勳八等
宗像大神曰神之高事記云是 天照大神の沖子也
大神勅曰汝之神降居在伊弉諾奉助天孫為布通
天孫崇奉余と今國家每有禱請奉幣使神是云
伊弉之伊弉前社あり神田大和社東郡封例云今
此二書之記有る河從一位勳八等宗像大神とあり國史之
宗像神社之從一位と授あり事及へる也右の二書之
記有るとあり是也其從一位と記有るとあり授あり
和の凡は沖神ハ神代ありけ國之社在りありて和國乃
守りあり永く天孫乃沖東と助け給へり是神代也
我々如 天照大神の勅明白あり故に古く世々の 帝

三つ此社之勅使と云ふは禮幣と云ふけ寢物と寄納し多し中尊崇と極り多しは孫なり

一 日本紀考 應神天皇三十七年春二月遣阿知使主都加使主於吳令求縫工女云々吳王於是與工女兄媛弟媛吳織穴織四婦女四十一年春二月 天皇崩是月阿知使主等自吳至筑紫時曾形大神乞工女等故以兄媛奉於曾形大神是則今在筑前國御使君之祖也既而率其三婦女以至津國及于武庫而天皇崩之不及即獻于大鷦鷯尊是女人等之後今吳衣縫蚊屋衣縫号也

一 舊事紀曰味鉏高彥根神妹母奧津宮田心姫云々

一 古事紀曰大國主神娶坐曾形奧津宮神多理毘賣命生子阿遲鉏高日子根神次妹高比賣命亦名下光比賣命比之阿遲鉏高日子神者今謂迦毛大御神者也
一 此事根元下卷十月上卯日宗像系氏人是と云ひ云り氏人といふ宗像君といふ成へし

一 宗像社他處より傳入者多し一延喜式之のせりる大和國城上郡登美山神社之座傳前國二座赤坂郡津守郡伯耆守會見郡是也又山城國曾野郡の宗像の神尔
清和天皇より告文と系せりし中三代實孫十卷に及へり是松尾務社也又嵯峨乃標谷守師子氏宗像神も是也式外あり又京都華山院殿の定まほ

また宗像の神あり捨取抄云近湯南東洞院東一町
中名東一條云武部卿貞保親王家貞信公傳伝し信小
一条と名稱し東宮九條殿令捨取家冷泉院に河立坊
名山院傳し大鏡曰忠平云貞信公又小一条大政大臣と申
朱雀院をひし色上れ沖たらしありてと云三人の大
臣違ひたりれ兼せむおまじりて小一條乃南坊由山路に
石きりてとせしきりてと云りてと云りて宗像の神
靈のありし色上れ洞院のけりありてとせむひしと云るの
あり日此まじりてと云りて大いそと一町八人まじりてありりり
ととちありしと云るの馬車と云りてと云りてあると云る
ひしの名抄にいと云りてと云るありし貞信公と云

像明神と云く物をもつ流ひたり家より沖位たりて
わきせむと云んくまきと云ひのまじりてと云ひん多
所事これと神位と云せむひたり

一 苑山院家記に此亭元貞保親王のあり 清和乃貞

信公お傳へし住西家 小一條介 時人以此より号東宮貞信

公譲千九條右丞相冷泉院 右西家 おけりりて太子事

即為沖河東宮と世に代詞假云云と後為名山院沖河

仍改東宮と号又稱名山院

一 三代実福才二 清和天皇貞觀元年二月晦日丙辰苑

前從二位勳八等田心姫神湯津姫神市杵嶋姫神

並授正二位太政大臣東宮一條并從二位勳八等田

あり此神社寄附の旨凡八年又福三年隆景隠居して
備後之系と稱し其苦子秀林尚國と名續いて然る
秀林國政を著して此神社と没収し隆景の尚社
附あり二百丁此神社と號し其系是と稱し
隆景歿れ内奉部河西の郡乃内首末百名と寄附せらる
河西の地を長政といひ歿れしにして此神社佛寺の地
も是係と號し追上一むいふ秀林の例といふ
此や一り神田と附初る事と交長十一年社領百五
寄附しむ田嶋大島奥に島之部の社人凡十二人
死せしむ三社の修理に其可なり 國主沙汰しむ貞
享四年十二月國君 光之公田島五十八の地と寄附しむ

又社領と稱し一田島二十二名余の地是又その後田嶋神社
造營料とす

- 一む一太宮司より一町宗像三所の社人七十人あり天正十二年
太宮司氏身亡ひ社領減りし秀林社領と没収せしめて多
く此社人俸絶つては錢をとりて是邦に還りて四方に離
散す今總て十二人あり其俸も極く微薄ありけり
田嶋社職あり田嶋二十一人大舟村一人あり十人の内太宮
司代宗孫宗像氏之家あり内深田氏二人岩氏一人也
大嶋の社人二人けり内一人は申付あり又一人は俸あり
一田嶋の社人を父母兄弟の忌に申しあり少島と傳して別名と
號し百りあり日社系に社人とありし村氏を父母忌

六十日足方の島日左につゝ年ごとく社系に社人の社事
 繁き所村民よりよく社系に産婦ハ二十五年の百社系を以
 小産も同一其更を七りて社系に婦女月日産あり七
 口別家々居て刃火と決て合長ハ十二日ごとく一電のあせ
 す神と系ハ大崎ハ父母に忌五十日別居ハ在てあせと
 一因とてあせと一社系を以婦女に産り田嶋の如し
 一社家ハ後ハ宗像ニ社ハ減幅津史と加へて五社と云又弘
 大もと加へて六社と云福達と加へて七社と稱ハ
 一安藝岩崎と市杵崎振と彼所ハ勤後ヲ延長社名
 帳ハ安藝國佐伯郡伊都岐崎神社と其社家縁起ハ
 自筑前恩賀島来ハ所とあり

田島社

一田嶋村あり右ノ記すノ宗像ニ神の内一ニハ神
 田嶋社職乃軍と社社と田嶋振とし其ノ云々云
 一神社ハ一ハ神湊ノ東六町海乃南一町ありともはあり
 一其ノ云々云々ハ海をといふ今其海と神の幸無と
 一其ノ云々云々ハ路ありていり一昔ハ祭礼ノ用ハ其
 一乃ハ其ノ云々一人家をせしけハ神湊とハ口ハあり
 一神湊ハ境内あり田嶋と云々事ハ其ノ清氏より四十八世
 一ノ大司長氏 後深草院建長年中愛ハ神院の昔
 一テ田嶋ノ後ハ奉らるる田嶋の所社を成まハ向ハ歌國
 一降依とありせり今田嶋ハ社家ハ宗乃神ノ如し

左第一 湍津姫命

中第一 田心姫命

右第一 市杵嶋命

凡三所の大神のやうにおのく三神とあり奉るといふ
其主とするは神と以て中産の田嶋乃社人ハ社と
以て中産の田心姫と云ふは中社と云ふは是と主と
し社の二神と密に云ふハ大嶋澳津嶋の神とも田嶋村
本社乃外別所と云ふハ社と云ふハ寛文二年本社と在社
乃併に移して大嶋乃社ハ在社の南にあり澳津嶋の社ハ
在社の東にあり其外在社ハと云ふハ社と云ふハ社
ハ境田に移して一所にあり凡百八神在社七十八社と

一々を在社と合せざるは列所の散在してハむり
留り社人ハ多しハ祭礼等もいささか社務ハすつと
ハとて皆在社の傍にあり百餘抄あり宗徳院長
治二年五月廿八日太宰府言上宗徳社英事といふハ是ハ所
社の事也近衛院天養元年宗徳氏信氏平と尚職成
争ひ戦ハ氏信亦有と云ふあり社務ハ片所の館とやく
其ハ社殿ハ乃ハ在社在社一字を以て忽ち成と云ふ
之後造學せしむ昔も不及年と稱して後大徳と云ふ將
軍足利尊氏ハ時大寺司氏俊與之ハ頼と云ふて之を訴り
尊氏の弟直義奉て訴るの事と云ふハ貞和年中造切
終て之を成就し其高麗の事傳てり之ハ遠く

年經て後 後土御門院文明の治より修理も終くもあり天
文の元形破り及び、弘治二年四月廿四日陣より火出て神
殿焼失し神體及神室も一時に灰燼と成り永禄二年
大宮司氏貞十五歳近國の教祖兼本之難をたけて大崎より遠く
三年二月本城より移り後氏貞武切よりして本館すも是れ
天正四年尚社再興の志よりて弁始あり、同六年造堂成
終り、同七年相日遷宮れ義式あり、同九年大宮司
並諸奉行連判よりて今と強より、是より、同十年國君 光
之君あり、同十一年、同十二年、同十三年、同十四年、同十五年、
社及一切強堂、同十六年、同十七年、同十八年、同十九年、
大宮司氏貞病室の形、同二十年、同二十一年、同二十二年、

と龍頭の七階より、同二十三年、同二十四年、同二十五年、同二十六年、
とあり、大宮司家の柏れ紋も、同二十七年、同二十八年、同二十九年、
一、同三十年、同三十二年、同三十四年、同三十六年、同三十八年、
て、同三十九年、同四十一年、同四十三年、同四十五年、同四十七年、
せ、同四十九年、同五十二年、同五十四年、同五十六年、同五十八年、
其事ハ、同六十二年、同六十四年、同六十六年、同六十八年、
と記し、同七十二年、同七十四年、同七十六年、同七十八年、
社あり、同八十二年、同八十四年、同八十六年、同八十八年、
の、同九十二年、同九十四年、同九十六年、同九十八年、
三宮より、同百二十年、同百二十二年、同百二十四年、同百二十六年、
由、同百三十二年、同百三十四年、同百三十六年、同百三十八年、

才一の宮とて神祇の次一人長阿知女次舞曲あり三取
物を幣杖藻弓劔祥物に由りて次之延韓神本次之早
神神次志都野本次之早歌次内侍舞次兼歳
樂次之次宮人次行列漁子本次申不化本次野倉
本次之約なり五月三日競馬次翁楽次東舞神宮六人
八月十二日放生會本撲田乐延年猿本あり

一 此神社の恒例は念日を八月廿五日ありし。永祿八年より
改て九月廿日とありし神樂ありし。一ノ風雅なる神樂と
ありしは許斐村の社人つとむ。又内浦村ハ龜名を美と云
去りて毎年猿樂とありし。昔ハ龜名といふと勅じ大
正四年十月廿二日氏經の時始りて八月廿五日放生會とあり

壬代までありしとて放生會ありし

一 此神社の神室より一々 朝廷ハ御書納さしあり多く
其外勅書 編者 將軍家の御教書公家武家の奉
納ありありしと也。さして時々ハ災害ありしとて焼
失し散亡たり昔 朝廷より大司馬の御りし 編者
之を在りしもの多し。此社ハ其又氏貞死去の後男子
之ハ其女子子孫亦た高田の嫁して長列といひし。古
文書に之を長く長列と撰りて今ハ何れも之し今在り
氏貞の昔近き歌仙あり 後ハ持聖古法眼の筆歌ハ二十
聖德院官の御筆
六牧師より近江花園主 光之君よりも歌仙一具あり
近しとあり 後ハ持聖古法眼の筆
筆歌ハ持明院の筆 今御殿に懸る歌仙の

画と國主の家臣にかけさせし是又 光之君の寄納し
よへるこけ外は利号氏に國々下向き付寄進されし
糧一飯も は糧を九別軍記 又何人付寄納せしや太刀一
穂も有り 西を寄進とあり 又何人付寄納せしや太刀一
八年大宮司氏依の付産崎海申より上りし翁の假面
一ツも有り小早川隆景の書状に通る社人中とあり
二通も隆景朝鮮を陣中波國よりあり

一 田嶋の社に南に沖飯の水とて井あり清冽なり神饌
と仰ぐよ必し清と用ゆあるといふ沖飯乃水と云社人の
濁様もよの此水と汲り佛ある民家より石汲は外片
根といふ妙に二ツの清あり竹藪と名つくそ又壺なりと云

一 田嶋の社乃沖炊を後に織幡の社あり鐘濱の社と
云ふと勅書とあり

一 田嶋社人村氏より彦彦山の社と云ふ事とあり
より彦彦山彦彦山の山依も地と不入彦彦山と云ふ
又彦彦山の若し地と入まば必若難と云ふ事とあり
いふ事ありといふ事と知りてはとありて控款のなる彦彦
山と云ふ事とあり 稻屋初宇彦彦里人も彦彦山と云ふ事
すといふ

一 田嶋の社に毎年除夜社人五人奉祀すそ
神前して毎年此年穀の豊凶早潦風病又此年
各つゝ方の吉凶奉祀すそ疑なく難事と云ふ

田嶋村の境内を社の南より方百餘石といふ田あり
是よりより申せり代々の宅地にて世の氏姓すてい常
といふ所に住す氏貞の時兵亂と恐むる者あり赤石の昔
岳の城といへり衆れり時のとい宅より日本記神代
卷に記すに乃けし神といふきありしに曾肩のをり
姓氏孫才十九卷に曰宗形君は大國主命の世孫吾田
斤渴命の後ありといへり又舊事記に曰阿田賀須奈
者大己貴命八世の孫といへり馬史の内にも宗形の古
宗像朝臣臣官の事ありといへり是又宗像の君あり
へし社家の後い言傳ふるに宗多天皇の皇子 醍醐天
皇の御弟と清氏といふ 神光をくちりて 宗像の社人といへり 延喜十四年 勅

うけて宗像の大宮司とありけ地と下り神社と改め
造りて織十六年ありといふ け後大己臣房後社目安といへり又
吉田神祇記に載之といふ
宗像社人の家説に曰宗像神といふは先づいふに 勅使
とちいふに清氏といふ社とありていふに 心算
勅使れ下向と傳ふる清氏宗像といふはいふに 宗像
と以て稱号といへり田嶋の里に居るといふに 居宅と名に
て住せりるを後代に社務の長職たりといふ事ありて 神代卷に
蘇我曾肩君等といふに乃神是ことあり 總の則會
人親王の時已に宗像祠官あり 事明くは社家の大宮司
乃初祖と清氏といふはいふに 前已に祠官ありといふ
そ家亡ひりて 醍醐天皇命して補任ありといふ

今案るに 宇多天皇の王子と清氏と稱する人あり或は
之ても古記のなまじく洩せりや清氏才二世氏男天皇
二年補任せらるる宗像社人の意説は是より以下世の
氏自らもて唐世の中納言といひ宗像才三司中納言
任り事及べりといひこま唯後世無礼の付彦登て所
里と於て初と中納言と稱して之を家といふも其貴と
せしやや然るハ 朝廷より 勅任せらるる一 新羅群
載才六卷 白河院 應徳元年七月廿七日の大政官着
と云ふ位上宗像氏道といふく流前國宗像社大官
司と補任せらるるといふ物もハ大司司中納言とい
ふ事め白あり氏道と世譜の才十世といひ但新羅

群載と世譜と年代遠へり世譜刪らんと是と野原才五
十四世氏俊と 後醍醐帝北冲時とありまじり且利才
氏君とと及逆一奉りて都と迹あり本列箱谷郡多
く産原とと名まじり河小勢とて其兵勢無微ありハ
九列の法士と云ふと附屬せし然るは氏俊家初と云ふ
附屬一仗方とせりて我宅と語得一法士の徽文と
ありまじり是より九列の法士漸くそ氏と屬せりハ
そ氏忽ち勢ひ盛んたりて葡地と赤務治と上方と
責より 帝都とがまじけなり天下と奪へり氏俊
神祇の才として 朝廷と背き初めて逆徒と隨ひ
可原は業識者の儀いんちや此時よりて其年より

初よりより後世の子孫も亦よりけは後一向足利氏より
屬して七十二世氏依すてハハののし廿七千二世無氏
より山内足利將軍の威勢およりて天下より亂さ九列
よりついで争ひハ亂業れ法士と國防の大内氏と後
山口と系傳する者多し一宗像大官司も大内義興乃
族より屬し山口と系傳す七十世の氏依七十世氏
依氏依の嫡子七十世乃ち高司氏依あるとはけけけ時
正氏と大内義隆より長列馬川保川と馬の系
御影と流りて馬川の居候より馬川とてハ大内氏乃
赤尾陶庵張与晴賢修の全とて婦女とめより二子とて
一人ハ男子福壽丸と云ふ次ハ女子とて正氏より職と氏

男と譲り孔大寺の白山乃城と居候一姓名と馬川隆
尚と云ふ其年病と有りて天文十二年甲子六月とて車に
七十世氏男ハ氏流り子とて正氏の家督とめて大高司と
す正氏の息女と妻とて陶全善大内氏と叛逆して山
口の宅と圍ひ義隆其難とのもい出奔して長列保川
大守とありて自教ハ氏男と山とありて義隆の嫡
子譲り教と防り義隆とありてい保川とゆんとせし
と名とて教進付て氷の上とありて我れすを歳三
十三歳正氏名列馬川とて生り子福壽丸とて七歳と
成ると陶全善とありて宗像四郎氏貞と号し天文
二十年九月十日宗像へ下り白山の城と居しとて

富人の市川とてあつたが、長列へゆきさつるを
一説は後
の領地を村と考ふるより正しき母後とて領地と物々事々も
を國とせしめてうしとされしは領地とてなりけり

社人傳曰 醍醐帝延長十四年甲戌清氏勅とうけく
大宮司と成る清氏と下りむひけり天正十三年乙酉氏
貞れ卒とありて大宮司七十九世年數凡六百七十二
年よりて宗像大宮司のあはひわらう他性の人社勅力
とゆき一清氏より廿四世とありて宗時と云一人を繼
す又宗時とゆきと云一人を繼は是と因幡大宮司と云
廿四十一代と大友氏往を繼はは二人の他性の人也貞余の
宗家像清氏の裔と云る先祖の諱と冒して名と
すも多し是をばせしめ非はして曰多し一人なる人

祖孫同名多きことありし事ありし清氏以下氏貞と
して七十九世は清とせらるる世系ありてありては
一氏貞れ智字芥太帝たつて孫今毛利家とはくは別
萩の城ありあり氏貞死して其家と傳はるる文書と
傳へきもあられは氏貞の女子字芥と方と傳はるる
之家とてあり其内 繪旨及 將軍家の御教書亦
凡五百二十余紙ありて外文書多し一題て長柄一棧
一とて是と納むとす

- 一 大宮司宅中しむり誅斐社あり本社に前と移さる
田嶋とてこのことハ録せり
- 一 隆永和歌集并五神祇記とて宗像大宮司廿四十八世

氏長

五甲古神代久一を位月のくも難ね乾と控きめこのく
又高敷 けりや松らとともよまきつらう昔の鶴乃のひかり

一 田崎村古宮目宅北西の山の上高宮あり昔より元和年
申まで社ありこの古宮目世に先祖の神靈と祭りしに
その後社を焼く所ハ景安二年国主 忠之君社と建玉
小山の上まじの風をきくして社に破壊する事 子かへ
風をきくは為るといふまじくお成業あけ社地とひまき
せんそ地とわらうと石ありしを堀出んまじの石棺あり
この一方と體骨あり朱くそつやう一方と弓あり福て
ありて太刀十二弓矢根七十ふあり太刀ハ朽きてはく人

けりじりうり元祖氏の墓と言傳の棺をこのの如く
納め葬りそありと社と立らう寛文二年卯社の祭
を一語の末社と傳へ後代に社を卯社の名より一従
して末社といふこととけ地社をいひ齋社れち一付
も ちうまを上高宮ハ山ありち地ありひ
ここのまじの古宮目内室の靈とあるまじい
より一社もあまらる本像多し是又寛文二年と末社の
かたつと掃て末社といふ此地社をいひ小嶺大明
神もいひけ地一社ありお殿とあるより其神名知ま
す是又右と向河と高宮と一社ありて卯社の側と
らあり

一 田嶋の大官司宅地ありの田中と名をてそ又理をく
柏の葉なりけり多々大官司に紋もかゝの葉は是れ偶
然と合する信別善光寺と名を柳とてあまの石の
面と本れ葉乃形あり名を本れ葉をて云つて物なる
と紋あり流後園もあり會津風土記云羽黒山の水
れあまの木の葉なるあり其名物も本れ葉の如く以
る名をてありけり

一 足利將軍義照公減田信長と名をてして畿内と出奔
し流浪して毛利家と名をて食をてて法方とてとて
せり入洛の事と名をて一付宗像大官司も書状を
送り其文とて曰

就入洛毛利及び初史切申し案付長法事二の地
を流の取入をて差紙一色流河を以て仍肩衣袴
をて入洛輝元下り候也

六月十一日

足利義輝判

宗像大官司取

右の使天正九年九月廿二日宗像大官司より云上代権井宮
より宗像法恩坊より切りし沖書あり年以ハ知れ
是とて足元ハ中納言の大官司家ハ世官とあり候事
由申す候也其文とて曰

宗像一家之事能く高例せ余を裁け於中納言
雖も相懸く官位で卷書以て得ん故方とて

別荘測方より各一人の橋上と橋下池を誦意
方方あり也

五月十七日

橋上宮

沖判

法忠坊

大嶋

神湊の海邊とあり事三里山の海中とあり岩のめ
くつと三里余民家も多くあり所れ甚く六所洋後所
も多成言此方にも所も谷里とよ大嶋此里の内と五
れ名あり民家とく二る余高人海人交まうけきと

宗像の神あり日本記神代巻上と申瀛とて
け嶋に神社の中津宮とておきこの嶋へつたの中とあれ
ども此神の沖事ハ前此と社あり記あり社ハ巽の方
む入り田嶋の方と神前石階のりとも并ま石階のり
さやまると登る年中十余夜ハあり九月十日を
束社七千め社束社此社名百八神今ハ十八社と合ある
社象の系は神位也是湊津姫とまとい

左

田心姫

中

湊津姫

右

市杵島姫

け神祇一人の二の家と二の日後と云河野氏の沖社の後

一 沖嶽と云ふ山ありじりハ山とて神社あり 天照
太神宮とてありそんふ寛文二年在社の境内
後て本社ハ田嶋の系社記と大嶋の沖嶽ニハ大菩薩
とあり沖嶽のトと小池ありけ下天レ川なり

一 社前と天レ川流る川沖嶽のより出づ高川瑞乃古と
つとして常半藏女ニ星の小社あり川と痛より石見女
髓脳曰筑前大嶋といふ事と早ふとてあり河と痛て
宮も小とハ彦星宮と云南とハ七タレ事と云ハ男と
このハ彦星の事と云ふことあり七月終より七月終り川
中とニ事乃棚と孫て早ふとてこのハ後と中と入
新と又と云ふも彦星宮ハ男ハ築前と云ふことあり

彦星の事と云ふことあり

曰筑前田嶋

一 乃星の事と云ふ彦星といふ并南ハ藏女とあり二
社の事と云ふ河あり天の川と名つく女とゆんと男ハ藏女の
宮と云ふ男蔵得んと云ハ彦星といふことあり七月朔日
より七の夜は彦星と河神と棚と孫といふ夜上中下三
つと云とて上中下ハ男の名と云ふことありては彦星後
て彦星と孫といふ彦星と云ふことありては彦星と云ふことありては彦星
と云ふことあり

一 此嶋の東南ハ海の向と種崎あり河口ありそんふ地嶋
ハ二里福島ハ河と十二里是より神彦ハ二里神彦より
あり河ハ八里あり

一 沖浦乃穴磯よりわし上りあり入二乃言さこり方ある穴
一 沖河山小山あり南方に向ひちよ平地あり昔毛利元
就大官司と教りんる言さしあり陣まきし家ゆへ沖河
山といふ一説とえ就ちあり玉川氏言さし是沖河の社人
河野氏教切りしとて流りし感状今も彼り子孫乃
家りあり

一 宗隆宗任より淡路國之配流せし後沖河流
とて流りし流りて死す其子三人長子松浦へり
次男と藤原ゆゆこ二男と大岩とそそりし高島流
とあり其子孫今も大崎にくと散在し或ハ福島人
は或ハ柏谷郡蘆野にもあり世に言傳りたり宗任松

浦へ流されて残りし子孫と松浦堂と云は是れ大崎
乃里人れ説と云ふ事なり
一 馬さけのりこり大井あり其流り事記あり
とあり

一 氏貞れ付礼せられ大崎とて宗隆れ誥誦と稱あり
要害と云ふ事なり是れ依て評史安藤氏撰古部
八帝貞保吉田多部補貞勝之人と云へて是れ守
とて心城と云ふ社より西の方一里ありとあり大室
司と難と難と云ふ事なりとあり

一 東寧山安昌院曹洞宗禪寺之安隆之宗任亦一世の孫
妙但尼建之今川田崎育王院の事も此れ地住系也

十系より一云里人の求よりて篤信因て此地の十系
と名付く人なりと云ふ事ハ云ふ事死
一 海雲山久昌院昔々志言ふなる事ハ曹洞宗之田嶋
育王院の末寺なり

一 比丘尼背所れ前より中十石或ハ八九石長三百石斗
も昔妙但尼い里人の為と波戸と築んとく石と船と
横溝島ありと末之切石成して妙但尼死後後継て
可人あり

一 津和背本社より西の方一里と入江庵く保し今とて
住系ありけり之寛永二十年是國船一艘あり船
中の人皆く降あり居りしといけ嶋の社人一甲受

四島(馬)の舟二隻牛とつまき道といふ事あり
破あり人あり海をく是船一艘あり二隻
ありとてをつまき道ハ是國人の内日本此調をいけの
事と同山とあり島成ありと舟あり二
未ありとまき道ハ舟ありの舟ありとありと團
主より舟ありと島成といふ事ハ是船の考た想て
浪子と二枚二隻ありとありとい船と出し帆帆の足ゆり
すてわたり居りて其後ゆりて之と船に二隻舟先
之合てありとありとありとありとありとありとあり
之浪國主 忠之あり村井仁ありとあり一人いけの嶋守
とあり並れあり村井氏あり山と入る家とあり人あり

きりてそ由と告ぐ二層の社人唐金百姓とて是舟
と乗出り其外浦人より舟に乗進くと進城なるは
船は遠くこの延くは進付くは船もふるくは島の神
祈りてまゝの風習り漸進付て舟と大崎とつと外
りぬ二人の内一人は邪獲宗の伴天連とて年二
一人をいつはんは是も元長崎の者又元長崎の
ころしり人にもむり天主國とて住りける夜来る
余も此天主國人ありける夜訪者もありしは日布と天主
の法とまゝめて唐の白帆はけり福國へりきり
はまはつと進出るとして連の後に江戸へはきく切
舟の目ありてありて難といふて教へ給ふすとて

之舟とありて船七費自に江戸より唐大崎の村氏とて
村井氏へ國主より賞銭納りたる又村井氏と付て船
乗出り見京市多田町の舟九家ありて年二よりありて進
けり舟は舟とて進出り止り地清後清初の浦志念若
杉まてはくは船快ときりて志くは事あり浦くより
早く加勢船と出り進けりて言をくは浦くより
船と出りける九家ありて又是の働まはひ物とて
是も賞銭行りてきり

一 源氏物語より玉くはれはと太宰守貳の女は許く
船人もききとて是のうらめしき事ありける
夫木集具氏くはり

と云ふ事なり此の事ハ大嶋神のこゝ成るのじつなりと

澳津島

俗にい嶋と沖の嶋と云
神と沖の沖神と云

此嶋の神名ハ事右に記さる海津宮の社人ハ舊事記
及大宮司氏後孫記の説に依るとい嶋れ神と田心姫とし
才一の事と大ゆへと申す田心姫と一左と市持嶋姫とし
右と湯は姫とい今田嶋の社家ハ田嶋の別社と云ふ
爰の候は嶋乃神産の別ハ申と市持嶋姫と一左成
田心姫とし右と湯は姫とい嶋ハ大嶋より子れ方と云
そらち四十八里と云と日長き時釣子と舟と出し風波
ふたもこハ昔前と云物とハ二千余里と云一とい嶋の

うらう一里あり社を西南に向ひく山のなかと平地乃
高きと云と立り今の神殿方九尺又洋殿あり本社
いへハ凡七十五合合て五區とす祭り云々此神名
百八神を海津と云社とて其百八神を百八神と云
かハ風ややく上の事二月冬十月高友の祭り
むし大宮司あり時を社も祭りありを世ハ社と云
して祭りハ風をきく吹けハ波荒きゆへ候事社
ハ風ゆへと祭りハ定ハ社ハ唯一人大嶋とあり其
家と一の甲斐といふ河野氏と稱す社人ハ嶋と云若
くはうらう毎日潔齋一才ハりくある日ある兼
て魚と釣して神膳と備ふ魚と得と云ハ祭り日と

とありて天子の軍國主國のたま社人のり方
我流社家の事と海子世に愛災の事河を習る事は
其人愛災あり付と人とありて沖饅の沖飯愛怪
あり或は沖飯とて売れ髪のおく小児の髪髪れうら
しく生いその入りや一或は海藻のやぐ或はよく腐りて
ふと船に忽碎けぬるもくろ愛ありま愛あるをて
其意とある人の心とて昔より此より遠の事せく必
ちうーちま

一 沖の物本土名と取らる事神の折ともひて必災と
なるよりいひてある事沖のまの成じとありて
ありては海子と神ありまらるる一三神俗なりとあり

一 鄙者ある事ハカクハ

一 長津宮の前二千丁沖の長この方と小倉崎とて小崎
あり高き水面より七丈あり百石あり

一 小倉崎と長津崎の沖門柱とて岩二つ並ひ恰も神の
の如くありまらる具あるやめ留む社の方と向りいと異
なるあり

一 長津崎の破と大鼓石とて大岩海中とて知らる事本
集のうらうらうらいけありて一着船とて一登敷船の
浦とて石とありて崎のひくく大鼓とありあしひら
湯干知と也

一 立波とけみの言とありて人よき候なりとて異件

一 南方磯乃岸に上りて龜石あり大なる人耳目鼻にまは
 せしむりて龜形に似たり龜嶽海中とあり
 一 崎守の居る處を海濱とせしうしうら岩と名ふるは是
 とはなるゆゑ又下まき子石とてあり初めては崎とある
 一 その海濱に俗に藪中とい名のまきとあるは石淨と
 ころりんりころりんり
 一 け崎と船乃入るまき崎守にあり所の前と僅と山舟と一艘
 ころりんりあり船も舟生崎の神前れとて左と右とあり
 一 波ありしゆゑと浪船をまきと名づるは人の門あけ岩あり
 一 せりけりありとて
 一 け崎の山中に沖麻畑とて一所とあり志木石生はちて子

のそ茂とて

一 田崎大崎と云はれ崎の東社と二所ありて崎七十五社一百八神
 ありとせせと二所ありて合とありて東社の教あり一社と教
 神といひおとせ
 一 此崎とあり只 多し地石龍子の歌昔よりあり志鳥
 町と名けて多し地とて内津菜海産多し新多し大
 竹あり 奥津島は土産 黄精 風蘭 沙防風
 天南星 大葉麥門冬 風蓀包橘とて 葉似檜桐 幹直
 約鳥 鷹 蛇 淡菜 棠螺 紅鯿 黒魚
如鯛海魚多 略す 久魚 阿羅 鱒 鯛 魚師 海鮎
 鳥蛇 在海中

疇町 高宮古城 本木 古城 舍利倉村 古城 養生浦
 渡村 鼓嶋 榑崎 大禮村 古城 徳重村 古城 石丸村 古城
 牧山
 平等寺村 古城 地 嶋

宗像郡下目録
 荒前國續風土記卷十六

荒前國續風土記卷十六

宗像郡下

孔大寺山

池田村と属せり。宗像山の少くはきり高山之山の分
 上と孔大寺控視の社あり。池田村より十所許を是初列
 芳野の親王控視と一社と云其法座のよりめきり昔
 延暦年中まき野郡内浦村とて急田三千所と孔大寺控
 視と考附せり其系田ハ宗像大宮司つとせり。彼又
 あり山の頂上と大宮あり。以て孔大寺と云孔ハ穴と云
 宗像縁記曰む。ハ彼穴の口。柳と榑へ東嫁女と生質
 とせりと神出て白馬ハ形と祝し或ハ大地の形と影し

ま女と食せしと云ふ物も古に射狼乃業々妖魅乃
類ありし一山神と云ふはいつし人色鄙の民俗愚昧
しつかり人さう喰ふ物神ともありめさひひたる
俗人を神威といふくひんて布て神と証す事
は後信一難した傳へんと生贄す事と云ふこと
司馬子魚の白祭祀以為人也民者神之主也用人其
社享之と云ふ一山神ありて用ゆへは乃物神
なりハ祭る人くひい山に報告ありて固五圍あり世に
都稀なり大木ありなるはけくそてむりなるあり垂る
と神ありたり又池田村の境内にみ足系といふに
系の長と十二三町横ありてあり村民の説とむり

孔たち山より悪風吹くといはれは其の牛馬を足死
しつと云ふ民俗の説も實なる是なり

田嶋 一切經并石佛

平重盛公庵玉へ金三ふと後して育王山へ田地と
附きしと云ふハ平重盛公没後と庵玉より其追福して
大經王經及石佛石牌と後より其石字像形に
若かりし時と云ふ平家亡ひて源氏の世とありそ
と文へまき人せりしと庵玉人いしと寺都へのりし
經經石佛とい社と納めて石牌と追きしと云ふ
ゆり又け社と色定法ありしと一筆りて書し經經
一經ありしと二部ありと庵玉より後りし經經ハ長

年中國主 長政より日光山 東照権現宮に奉納
しあふとい冊いりて取張らん今控田嶋よりありる佛
と申し字以名簿の岩倉内よりありしは是も寛文二年の
申社の側よりありし書人守橋或人より京よりあり
制化巧妙なり色定法師のかけり経巻を記しは彼處玉
よりありし経巻と元本として一筆より書写さしあり
色定も田嶋の座主兼祐より平治元年誕生字定良
祐といふ御寺宗山より光國師法よりありしより釋門に入
りて存籍より了る一日法華四切法をえと誦しりて
経巻一筆書写の大功と貴し是より後に入宋し本邦に
より宗像郡田嶋よりありし大宮司氏國より對し弘く瞿

曇の言教と信之誘くし字經の切徳と以てすし是より
於て氏國ゆ依の志と貴し資成とすし良祐として
善主經と書し板屋と神廟の側より書寫さ
し何れも是より起信勅靜書寫と事し書くも善書と
いふもは道といひも机と首といひて書寫しりて是も色
定法師二十九年文治二年四月十一日初めて筆と記し
善主經二年とありて是切とあり其の字十一年経巻の末
に兼と名と記せり建暦二年書寫比丘宗祐法師と書
又また六年一切經一巻の比丘良祐とあり或文治二年信
良祐と書けけ外も色定とかけり名とを書卷も多し
紙とつきし糊の製法は入宋の付習いありしとありて後同

とて道に或曰色定法師入定する時を安んじしゆゆ乃
後名を改て常諸或ハ色定と云宗朝の経大經の儀り
し諸母を流しり中僧安ん入定して一切經と誦す
る事と記す即ハ色定事と云ふは説非なり色
定と安んといふ列之年時透入りけ經中をみず安ん
あり蠱多く又中はやけてといふ中をみずと云ふけ
經經人々も神廟の西乃側別廟ありて神室の如し
色定と云ふ我本像と刻し垂しも今も有し仁治二年
圓寂す其墓と田嶋村奥の寺あり白塔と云横
嶽山奥の福寺にあり此物も奥の禪寺ハ色定住
せりちりありは之後其墓あり村墓ありの境内あり

吉田村 法園寺 系道 古城

吉田村法園寺ハ屏風山と号し古言あり田嶋の在社ハ
山下に橋あり五丁半山下の橋より寺まで二丁あり 龜山
院弘長年中僧皇鑑是と云其墓ハ坊地と銘し宗
像大宮司長氏授けて堂舎と云五社の在地ハ佛像
と安置し法護國家の居陽と云ハハ法園と云ふ
皇鑑より仁秀法皇と二十二世ありて社主汝れと云後山
依住ハ長三年昌傳と云傳ありて住持す 山別仁
和寺の末ありと云五社の在地ハ大日 子像ハ一 釋迦
ハ二五 ハ二五 茶師 ハ二五 け三佛ハ大師の化と云阿弥陀
の在地 ハ二五 是ハ佛師之化と云 寛壽 減幡大願社
の在地 ハ二五

この傳教大師の化と云ふ名の佛もまじも大なる本像あり其器化に精巧なる事畿内及法別にも掃く前國主 志之公皇と五在化して寺附しあはれ佛徳あつたをこの凡そ地垂臨として事ハ深居より言出さる事として神道として事ハ此の故言傳ふる事のよしと記すのこ又此より大政官府あり又永二年と書り日大なる寺近状一通あり金胎兩部の曼陀羅二幅あり唐筆といふより大般若經一部を五弘堂とて銘曰証并あり五佛堂ありより國主の造修あり昔のいふ好宗にして寺殿も多く付くらしといふも近代も寺殿も幾くおつたはる寺院も多かり

一とて三址あり今ハ皆遠く是院と云一坊の遺骸まじり近きは是院と云ふ一昌傳り才清集と云傳傳より始つたを是のいふにせしといふありて住する事四年と及り物々といふ享元年二月亦より五穀と溢る本食一四年二月十九日より斷食一四一り一歳と十七として入定して死に帝世の事あるは四方より多かるるもの多かりしと云は則是院のうしろから山とて葬れ

- 一 吉田村のありたるあり是をてい傳ふ是寺の内浦へ執ゆ昔あり大なる寺といふこと
- 一 吉田村と吉城ありと大官司三十七代氏仲と城と

高像遊考に記せり

△岩窟不動

徳國寺の武丁奥山のかきく石窟も其神と石神の
不動あり其長三寸ありこの神より其石より
詳あり此窟と文字と刻りてありて是れ今も在
近其人訪てあるもの多し二月廿六日此窟の
事訪する人甚多し商人四方より集りて市成
なり此窟は又吉田村の境内に田崎村と云ふ所ありて
田崎の石窟と云ふは徳國寺の事なり

奥聖寺

多福山と号し修徳宗に

田崎あり是を元年に在臺より用山と徳國原の事

即山和尙の宗像氏後の所に寺ありと云附せり近代も
ありし門前と云院ありし寺多しと雖も孝寺を以て
とてむし一名刹のありしなり今も多福寺なり

吉高八所大明神

惶根と云正殿とい泥土煮る以下の七社を以てお殿と
いふて八神也縁起も赤られまゝて十村の土地神
なり昔も沖積河に神事ありといふなり

許斐山

神社 古城

王丸村の上と許斐山といふ山と許斐権現の社あり九
月十九日祭あり 文徳天皇乃天安元年慈路権現と
勅信すと云像縁起と云へり云像古事記より付

内殿村

飯登山古城

十社王子大明神あり國常立号大に貴命神皇魂尊
 正哉吾勝尊國狹樞尊伊弉册尊瓊々杵尊此外三神
 ハ神名未詳と云又猿王子あり是猿田彦なりといふ
 九月十日余れを飯登山峯として飯登山と云ふ
 山は村の境内にあり其下に古城あり宗像大官司
 瑞穂あり常々守り者と置りといふ
 一説宗像記世考曰氏
 貞の神河内城とありん
 永禄十一年九月朔日立花氏の臣飯登山守あり宗
 像氏より巻一並なる兵と戦事あり一宗像は吉田
 劫急申命の子殺すを長七人守た力ありしに徳らと射
 多し時敵と射殺す事多し立花氏の兵多し射

殺さざりし勝の不易して立花門遠くと近付
 として款多くある由宗像記と云るなり今上西郡村

山田村

白山城 増福院

白山高山の西に禁あり白山に古城の迹あり氏貞より
 前宗像大官司叔代居城の跡に傳ふ氏貞も此城に
 隠居氏貞貞も長列より死す十二年に居此城に居す此山
 を孔たるといふ事ある事其下白山権現の社あり
 此山と云ふ所の山と白山といふ
 一増福院とむりより昆沙門より又近世に宗像大官司正
 氏の後室孫と女氏男其妻の墓あり母子の墓一ツあり
 又之傳女四人乃墓あり皆た宗像氏の爲に殺され

後室の怨靈崇りて地勢善産とあり女像と成り
此寺と立て安置其因縁と尋らるる後室の居宅と
山田村増福院のちあり則ち大宮司に別宅と是より先
女像大宮司氏依大内家より属し因防山より出勅せし時
其所の沼川に馬川と名をとり馬川と宅と接して居候す
馬川氏と稱す氏依の子刑部輔正氏も馬川と云ふ年傳せ
し時陶尾張守時賢入を合為し男女とせしより二人の
子と産み是を湯壽丸と号す其母は女也此氏本妻と
宗像山田より女子一人あり名を菊姫と云ふ氏家族
氏續の嫡子権政氏光と名を稱しして菊姫とあり此
世家と傳り隱居し山田村に住し名を澄尚と改む

天文十六年甲午八歳とて病死す上八村承福ちとて葬り
氏光の名を改めし氏男と号し氏男も亦大内氏に從ひ
防別への勅らるる天文二十年九月陶全為主君大内義
澄に叛逆す義澄を乱とてけて長兄沼川大宮司と
名を改むる時其子氏男を教と改めたり叶くは
義澄のあまを慕ひのちとて敵討けしは氷の上と云
ふ事とて戦死す生年二十と云ふ後陶全為の弟の
とて此氏馬川とて云うけし陶の娘のより子湯壽丸と号
氏貞と号し此氏の家督とし大宮司とせんといふ天文廿年
九月十日宗像より下し白山の城に入るとり時年七才なり
宗像家臣とも同心を率いて曰氏貞此氏の子といふ事あり

の子は氏男代才代松辰ありこも成氏男代才代松辰ありて
家智とす一人物も尚年二歳初揮ふは先菊姫と
一族の内二物人と知りこもて社職と継ぎて一氏貞と
ト一系とせし事一應家人こも亦もさきこ左と
争て押て白山へ入城すし事陶敏の事事是氏
貞代家人寺内法部重我意とありまの事と評定し氏
貞と立んせ氏又代松父先大宮司氏清も我子代松
と立ん事と信じてを依り向に又陶の事とありて氏貞
と立んといふものも多しとて家中こもつる事多し陶金島
是とありてち内治の事と有りし氏清及代松と殺さ
しいしハ新島村 且後又陶の事知りて正氏の後室并
母過院の事知りて

と息女菊姫と殺し氏貞と海立てて宗像家信
石松又と清尚あり言付野中幼翁由孝言菊とを
後室系菊姫と殺さし一説は氏貞の母山田の後室は
害多し事とありて石松の言付 天文二十一年二月二十三日
野中峯として殺さしとありて 天文二十一年二月二十三日
の夜幼翁由孝菊山田村後室の宅にゆき先菊姫乃
局と忍入る菊山田村の夜とありて菊山田村の夜とありて
とありて後室とく出て居りしと切殺す十八歳と
ありて一人美しう後室の居りて奥乃りて走りゆき
後室殺殺さんとせしりて其の事ありて思ひこりたり
らふ後室二人の者と白眼にて海を飛ぶ事とありて殺す
事は恨めしう子孫までありて我々女をれども海

この世に能く事して身力とわきて自害に極む形
勢なる人おそろしく眼と驚りて後宮にはしり小女
三月小女と云ふ一人の女房と云ふ悲しき二人の付奉
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
後宮に刀と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
宅にしらの山乃岩に云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
月十八日峯を越え鞠の部生田の歌をうたひて居て居る
ゆゑと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
漸くしてゆく若しと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

成りたるやうにして後宮に妻子兄弟殺入の何れに病と
うける事なき如くあると云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
後宮と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
死すに後七のうらと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
人出師と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
りて崇と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
依り狂病と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
おそろしくと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
という恨と母の咽喉と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

のより之傳へし中座武内大臣西に住吉大神東に
志賀大神也文徳矣祿三代矣祿永の國史といはれ
位階と後朝廷給ふの事多し社あり山の神
の氏家と云事五丁許良れ方ありけし山をくして
つらつらとむしひてと背向あり林木茂し或は
けしと小屋形といふあり海よりえれは形屋形
いさうゆへと名けしと三方の海に在地といふ山乃
明らうらうらと恰とあるの盤とありあり山の
神廟ありお傳へて自武内宿禰の住地ありと慕ひて
我死ハ神靈を必い地と安んじんと云ふ蓋吳城
東の笑とちり防んとありとそ是より傳へて後人けし

初と立といふ同博國法若狹宇治の神社も武内大臣と
系より大臣博といせて其をといひしと博といふ
此城博のやう武内大臣の神と系よりといふ後
たよりあり武内大臣を景行天皇ハ沖時より
帝ははく政務と行ひ其壽三百二十歳 仁徳天皇乃
沖時薨きし 神切皇后と助けて新羅と云はれし人
長命の事ハ唐土の書五雜俎にも記さるる像の社年
中系記の白正月十六日城博乃社と諸歌を云ふ事
の耐後川ありて後多き流の歌あり庭火といふ
神宮ハ早御押林あり笛初奏ありと記さる社下
かへりまはたの方と武内大臣の沓塚といふ事

せしといはしはたしう故に種の中崎といふ種のあるまゝ織情
山の良れ方を下程沖と云ふ今と種のあるまゝといふもく
こと里人といふやうれ事云國ともあり朝赤國敦賀郡
金ヶ崎れ海といひ朝鮮より種と後をいひ河といふこと
まゆへ重々崎といふ氣はれ海といふこと朝赤より河の
ありてありといふ

万葉七のあつ種の中崎といふ事云國ともあり朝赤國敦賀郡
形冬六のあつ種の中崎といふ事云國ともあり朝赤國敦賀郡
大島あつ種の中崎といふ事云國ともあり朝赤國敦賀郡
宗像大島司七十二世無氏文的五年といふ種とあまんとて

種年と多く平い種崎といふ舟と多く海海令
入大綱といひて舟れといふ事本を以て是といふ物也
種ありといひ時とあつ種と風多事といふ海と震動
てま愛あひいゝあ法人出怖といふ事云種と取あ
る事云種といふ事やといふ一説といひ種れ龍頭きこて
種ありといひけり種といふ事云種といふ事云種といふ事
と知まひ又長政云入國といひて後其九年地海に波
頭と築く事とあつ種といふ事云種といふ事云種といふ事
は種とあけんといふ事云種といふ事云種といふ事云種
石と築めて波戸と築せといふ事云種といふ事云種といふ事
多くや集めてはたしう種といふ事云種といふ事云種といふ事

くまきある一故にあしり斯の如く一あしり云今も古波
頭してその時の名残なり此時七種とあけんと一あしり一像
一風多烈一してやとありとも七種あるを又書上におわく
雲に紙幣と海に泥むらこを紙幣水南と云々一と
可き必なるありと云種の形海産多く付てたりと云へん
漸くよ其にちるゆと云

一 種崎の所はむらこ一は日の浦とて上村の西に氏家と
長政云入國一むらこ一は後日浦に人家と今れ種崎一核なる
延喜式二十の巻に書る薩南國馬とあるはとけり一
と云や世事ハ想論一ありと云

神湊 草津勝島 古城

むらこ海をさの流神をて神湊氏家の東にあり
且そより大崎と舟と流一太崎より高し舟と若る人
神湊と名付あり所も又此北の海中に務崎とて小
崎も氏家ありと云これ吾神は足利志大明神社と
永徳九月七日市村崎雅と勅徳人云禪と云来り
又其崎の古城跡も四塚と云云一氏後と云十九代と云
二十二代と云像大宮司氏後瑞珠跡とて古跡甲斐と云志
ちもしり云務崎と古城の址二区も是も大宮司曰瑞
城なりと云云

宗像山

赤馬村の上の薩岳と云瑞地と揚巖と村と云

山より林茂りて猪多く住む其頂上は城のありき
昔は吉司六代氏後い城とけりて捕へ住ん後廢城
とある氏負いりて尚國とありし付孔ちちの白山れ城と十
二年后住きしと兼て此山のお害とこと知りて再興
一永祿九年白山れ城と去りて城と移り常の住に打落
く岳の名を改めて嶽と云ふ祭礼の付田路たじの沖内
と云定と替く當り神事と勤め終りて又い城と爲り
古老お傳へく昔 神武帝日向より赤馬一國の邊に
ありし時一神ありて赤馬と云ふなりけり里民と云知せり
其人是を依てと里と云ふと名づくとも云ふ赤馬と云ふ
といふ赤馬と書と誤りあり 秀吉云天正五年能登

征伐の御りといは城に入らばと云一説櫻嶽村の二層と
と云浄土と一宿と云ふといは時小早川澄景といは國と
納りしといは城と云刻捨と云ふ一合せり依ておと十
六年い城といはてり城址在九一階津大いにも向ふ
石丸村のといはと云ふ松と云ふと東に九二階の家の
谷といはと云ふ九白石谷と云ふと外に丸いといは
丸九といはと云ふと長政云入國といは時を赤
と云ふ氏家只四ヶ所と云ふ後氏家多く出立宿禰と
あり山と櫻嶽と云ふ小村とむいハ寺と云ハせり
誤て今ハアといはんと云赤と云ふれ小平等と村と平等と
の地ありといは上の山と上山と云ふと岳と上山といはれ

と名峠と云き聖郡城廻村に越す上と孔と
乃同の石と百人堂山嶺と云き聖の言今人越す上と
赤る十村に名吉昌竹丸尾系石丸名砂徳
多久二高丸 櫻岩寺 赤馬所 昔と此十村と
て赤馬と称す

○ 義 築紫より山嶺山の西よりおきふと君と家とを以

大穂村 不焼寺 崇聖寺

大道に南道谷に申すより南方ハ山と申す小川流す
川と稱て南方ハ民家多ク一民家のあるる川とのほ
ゆる事敷所も南山をとりて民家れしり山とせ
すとり在る村と申して杉山を狭し不焼寺崇聖寺ハ

と最奥より村よりハ寺一崇聖寺ハ編部とハ
うりしき好寺ハ佛堂寺番ハ禅寺にけるハ許斐乃
城主多賀出雲也 一説氏 隆忠 天文年中ハ創之ハ
しりし小早川隆景の石塔も隆景ハ安芸國江田より
葬らるるハ一時住持其人と云ふハ古人の遺言
崇聖寺ハ久不焼寺の親善堂ハ永享元年壬子月
創之より創之の人性名知進ハ縁起新舊二あり拙
酒とて又理とすハ方々も多しとハ希見壯麗
あり堂ハこの堂殿ハ美とて又親善の像も昔焼失ハ
不焼寺ハ名とあり今この像も京都ハ佛沙造とて今
乃堂ハ堂安四年先國主 忠之君とて之ハ中を後と

国君より修補しぬる

有千瀉

荒司村の北は屋敷のむじり、はつこ、まじとある。近
近年田とある。其方、昔は屋敷とある。又柳の宿
とも荒司村にむじり、上方のたきうりとも定
宝元年屋敷の氏家とある。清きして荒司村に加ふ
とち宿なり。

万葉 ありちとむらとそとむらとむらとむらとむらとむらと

湊多田

け地いふとてむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと
ありむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと

人ありとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと

光寺 長谷寺 古城

長谷寺と説き置る。大和の長谷は説き置る。勅法を
むらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと
谷中とある。好村と古城の地をいひ、嶋氏貞村の土
とある。まじり、むらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと
むらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと

西御

上下むらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと
むらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと
之東の谷もあり、むらとむらとむらとむらとむらとむらとむらとむらと

を対せりて近代ありて河津と云士住其祖と尋
りて伊豆國伊豆郡河津重貞初て尚
國移居郡小中庄より庄司とありて孫持あり時
家無へあつてつて上西川の南に在河の神社大森檀
現の社務職とあり大内氏と絶つ檀家六世の孫河津與
三兵衛光り大内義興より初め状あり大森社務職の事
也先代者神役以除得り勤仕役のりて文なり與乃
字と初る與光より新四郎隆業も父乃ありとつき
西つて住り天文元年之元親貞之宗像氏定改あり
とて初りり時大内義隆より感懐とありて是も隆の
字と初りり隆権より新四郎隆家宗像の臣と初

尚安の婿とあり大内義隆のて後河津も宗像氏貞
の家臣とあり永禄十年赤坂の戦い出仕せり時氏貞
いりありありと隆権と教りりて男子二人嫡子七男
こまは臣初尚安の孫ありとて河津のりりて後河津
宗像氏貞より家人多く置りりて云大森檀現の
あつて南とありて教また大森神丹生白山より伊豆若
根三浦の神とお願ひとあり凡六代ありとて又六社
大森神と号ひ此神のお地とありてありて光は九
之末いお村の民を鎮奠とて大森檀現の使ありとて
喰ひは河とありてありて禪僧言蘇と河津初
河津隆業よりあり天文丁酉の年い里とて生る始め

勝浦あり汝下りまゝに下りて海とぬりて寛文十年海と新
田と開きて八十六丁とあり外陸原二十丁とあり勝浦
村とあり其長南北六十丁とあり今も浮き勝浦の上れ
高き山と勝浦嶽といふと二十丁代々守司氏國城
址と勝浦のより遠く南六十丁の大塘と東西四十南北
二十丁と谷と入と唐一凡七谷と勝浦信也年
ちれ松永と年守大明神の社ありい信と百塔とて
石塔ありいしりい百と一といふともあり

海中島

勝浦村と梅はれ島の海中島と云ふ事十丁許
をいひ勝浦と津島島の間に出入海ありいゆいゆと

南方と海とて海中とあり島と云ふは海の中島といふ
成へ一宗祇法師、梅南抄曰海の甲を極深と云ふ
わづら浮き唐城と云ふより南のゆけはをて浮きを喜生
浦よりも少ありとかけり近世里俗多深と海の中島
と云ふは是又本抄あり其境地洲と云ふ島と附
合せりけり用ゆへい

秋の製り汝下りの月れり浮き山とてつくはれ中島は後九条園
けりこの名号の後京極良経の歌と云ふ良経の歌集と云
せし山とて浮きと云ふは勝浦嶽といふ事ありとありん
梅はの葉の山といふ事あり

五月候

と載へ田嶋より葉の部として内浦と西より葉を合へ
ゆゑと云はむの上方への大道なり

右萬葉集の巻と天平二年冬十月大伴坂上郎女祭
師家とより道超能能圍ふ像名見山之時作歌一首と
かけり大己貴命少彦名命け二神らめと合せ天の下
と化るるより日本記神代卷と記しけり人のつくま
あへ

田嶋村 牟田尻

け村の西の山々一人れ住し靈多し下よりあへハ
まっんゆ凡大小千作と名の山の崎と名載と云
はる冬まきと子影と名見多く飛越す山乃
まあると名のあへれ流とのころと云名の山と載
筋よりゆへや

○ 總取大の神

怒山村よりふ像神事帳にもろ里氏れと傳
あつじり 神切皇后物羅と伝しあつ船の帆
とわひ神と云其神名と伝ひくあつは是足
媛とあつし社つあつし足媛の事ハふ像と社

のほく、日本記とて記さる

野坂

此河に長門の一宮住吉二宮神印と宗像大宮司勧修氏一宮いほくして小本大明神といふ

大平山

名残村と鞍馬郡上り本村の境にそとそと茅山之
大平山の南西に名門山あり上り本山の山之林本上
りより又大平山乃東山に名宗村以上の名や山大平
山よりそと山あり名残村むしハ岩色村と云

依嶽

田野村とありもそと依嶽大明神の社あり

晴町

高宮古城

け所むしそと一民家あり斗ありて本村の枝村に
しそと元永十九年 忠之といけ所とそと日よ馬柳と
赤弓の馬驛行してそとるをたれて晴町の西
の山に昔そと名れ榮村ありそと除て民家と
いほく橋一えそとそと一在木れ枝村と一ツと人そとそと
け所とそとそとそと一むふそとそと岳れ古城是ハ作變
山の出城とい傳ふ宗像進考曰吉宗源内定
書そとそと山の橋とそと加美美地也の隆也とそとそと

在木村

晴所の南にそとそと谷れ中とそとて幽陰ありにあり

八幡宮あり住社之村中ハ川と居るとしてせうゆく
川のわし側之岸に宮より出る多きり極て清潔之
延宝八年は地倉倉の家之者之怪物来りて婦人
と打やまは守り人多しといふも皆ねあつてさめは
取らんとせし事能くは睡りて覺るるも亦是
怪物の業之其外村民の婦女と犯て懐胎せしめ
さふと産て死す其子ハあやしき形之いふは狐狸
の勢ふんとして良女とあつさくあせせりさきとも
た鳥さして追つとも勢のこくは事凡六年甲子
乙辰と石見之後貞享二年國主が逸物の
良狗と二匹を居る編る是より彼あやしきもの

思きこく石見経路で後一程ある彼をうつの良狗
出て是とたり事ありさきと終に勝負を
してあやしきものハ逃るるの物の鼻を利刀よく
切らぬく横に居るよりさきともあつさき又一
の狗も普通通に捕らるしと怖て安全に我
したハ極めて好むけり凡れたとハ眼口容兒のさ
きより後路に彼怪物来りて経路で後けさの獵
師山に入狩りし林中にあやしき數多し猪鹿
ありは狐狸もありは又猫もありはつさき
んさる數に在れば民家つさきハあつさきもの
はとんといふ

付初之長成事... 他民屋皆枕於海とあり

一 鼓崎は後村の... あり之形古鼓のこし取と名づく

一 掃崎も後村より十町... 掃崎は後村の... 掃崎は後村の... 掃崎は後村の...

一 牧山は... 馬に牧なり

太礼村 古城

大澤中... 太礼村... 太礼村... 太礼村...

瀑布

徳重村

縁の城と云又名跡の城... 赤弓乃唐と云... 隆尚宿初とい城と云

石丸村 古城

城の徳丸城と云城と云

平等寺村 古城

平等寺の城と云城と云... 或時火入と云... 或時火入と云...

地寫

陸崎れ少しむら崎あり民家多し一居居せり山の側
居住する崎あり島あり島の間に水田あり
崎の嶺崎の神の社あり奥の崎れ神と云ふ
勅語にてあ
るの嶺崎のありし名ありは崎の西少く白
崎といふ民家二十四あり大崎の崎といふ
崎あり
崎の岬ありは崎の崎ありあり吹浪の夕ありと
よるいづるといふ住居ありしをいふは民家
のありしをいふは崎の風波ありし時
内と繁くありあり長年中 如く繁くあり
破損あり元和四年二月十日 長崎云々再築あり

橋伊豆匠をりせり

飛前續風之紀卷千六終

